

特集 命を守る。そのために

雨

平穏な日常を脅かす災害の恐怖。
命をも落としかねないまさかの時は、
前触れもなく突然訪れます。
この町も決して例外ではなく、
幾度も危険にさらされています。

問題が広範囲で同時多発的に、
前触れも無く起こる非日常の状況下、
自身を守るのは日常の備えと意識。
今月は2度に渡る「九州北部豪雨」で
未曾有の災害を経験した朝倉市から、
「命を守る」ための教訓を学びます。

取材協力、写真提供
・西日本新聞社
・田川地区消防署 本署／金田分署
・松末地域コミュニティ協議会



迫った最大級の危機

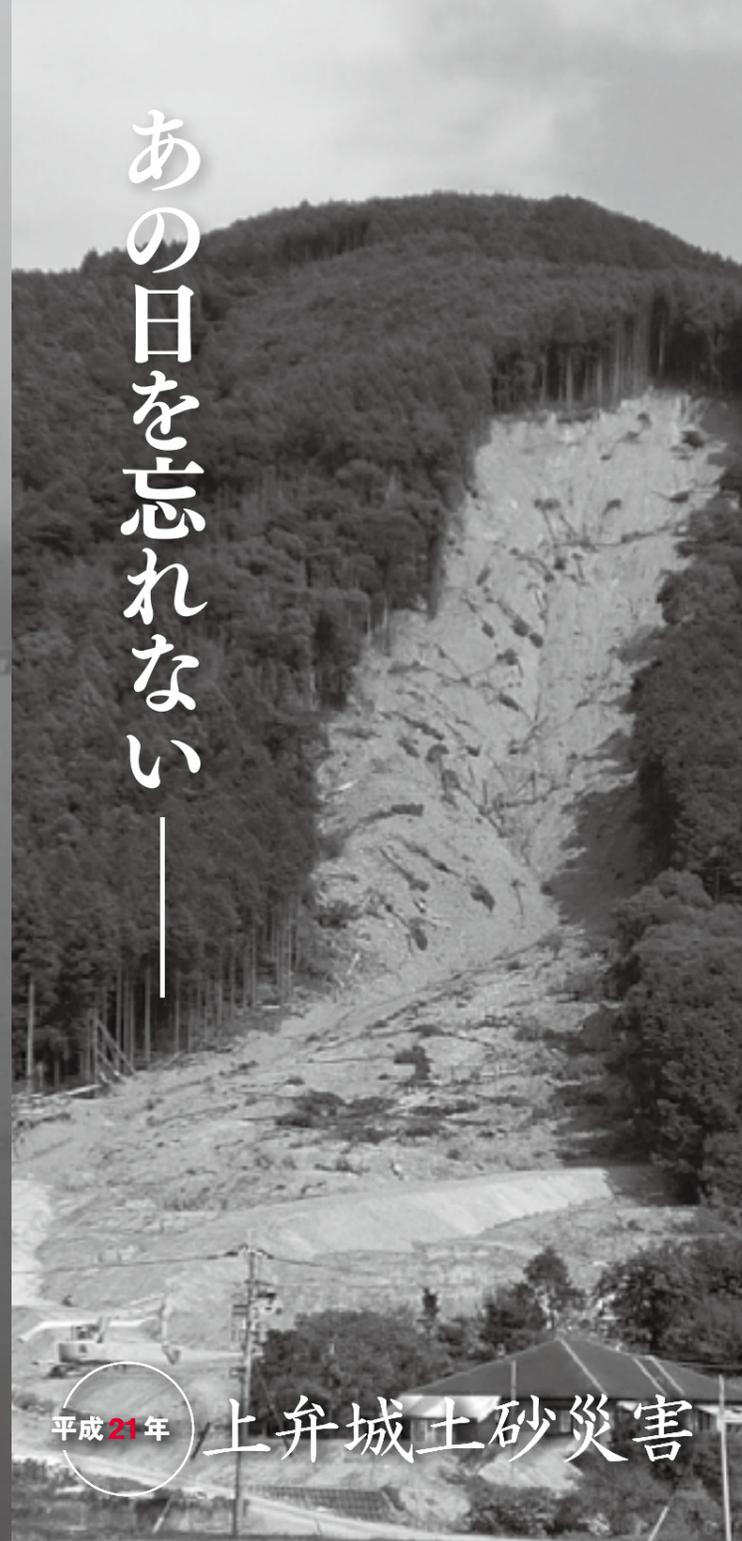
平成30年

西日本豪雨



観 測史上最大、町内で7月5日から3日で前年7月の倍以上にあたる降水量423 mmを記録した昨年の豪雨。町初となる最大級の警報「避難勧告」が発令され、252人が避難する事態となりました。神崎地区の広範囲が冠水、赤池の草場地区では住宅2件が孤立するなど、死者のないことが幸運と呼べる大災害を経験しました。

あの日を忘れない



平成21年

上弁城土砂災害



記 録的な大雨が各地で水害や土砂災害を引き起こした「中国・九州北部豪雨」。町でも豪雨が3日間にわたり降り続き、土砂崩れで民家2棟が崩壊、5人が生き埋めとなり、うち1人が尊い命を失いました。あの経験と教訓を永久に忘れないよう、7月24日は「防災の日」に制定され、毎年黙とうがささげられています。

突如襲った恐怖



平成15年

7.19 ゲリラ豪雨



未 明から突如激しさを増した雨は、国土交通省上野観測所で午前2時から4時間で161ミリの降水量を記録。短時間で年間平均の1割にあたる雨がたたきつけました。道路は土砂で寸断、低地は水没。嘉穂劇場も被災したこの雨で、土砂崩れ81か所、家屋半壊5棟、床上床下浸水83棟の甚大な被害を町にもたらしました。

九州北部豪雨

○ 県南山間部を襲った未曾有の災害
平成29年度

人的被害35人、家屋1,400件以上、朝倉市に過去最大級の被害を与えた2年前の「九州北部豪雨」。朝倉市街と東峰村の間に位置する、朝倉市の山間部・松末地区を襲った災害の恐怖と、復興を目指す地域の声をお伝えします。

朝倉市松末地区 24時間の実録

7/5

この1時間の雨量は史上最高の137mmを記録。迫る濁流と土砂に、家屋や車がなすすべ無く流された。

○ 午後5時～6時 観測史上最多の雨量

○ 午後3時40分 届かなかった無線放送

伊藤会長は地区全域へ防災無線で避難を呼びかけ。しかし送信所は故障しており、無情にもその声は届いていなかった。

○ 午前12時過ぎ パラパラと降雨

○ 午前10時15分 不安のよぎる朝

市全体のJアラートのテストに合わせ、松末地区では自主的に避難訓練を予定していた。しかし連絡の無いままテストは中止。伊藤会長は連絡体制に不安を感じていた。

全てを飲み込んだ濁流
6割の人が去っていった

「雨が過ぎ去ったとき、どこが自分の家か分からない。流れ込んだ土砂や流木で全てを失った人もいる。山間部における国内最大の災害ではないだろうか」2年が過ぎた今も残る災害の爪跡を、朝倉市の住民組織「松末地域コミュニティ協議会」の伊藤睦人会長は静かに見つめました。勾配のきつい谷間にある松末地区では、付近を流れる赤谷川と乙石川が氾濫。集落には大量の土砂と流木が流れ込み5、6m堆積するなど、最も大きな被害を受けた地区の一つです。災害前、地区には約250世帯が暮らしていましたが、今は約40%の100世帯にまで減少。「家屋被害がなくても、裏山の崩壊を恐れて避難を続ける人もいます。生活再建を目指しても、農業をできる土地や道具が全て流され、やむなく長年続けた稼業を捨て、都市部に転職した人も大勢いる。時間がかかるほど、地元を去る人が増えるのではないかと伊藤会長は危機感をにじませました。

「家族、家、大切なもの、多くが失われた。被災して2年間は苦悩の連続でした。しかし、どんなにつらくても災害を経験した者としての責任がある。ここで起きた悲劇を繰り返さないために、災害から得た教訓を伝え続けたい」と力を込めました。



松末地域コミュニティ協議会
伊藤睦人 会長

○ 午後3時 途切れない強い雨

雨あしはみるみる強まり、水は田んぼの畦を越え、橋の近くまで迫った。危険を感じた伊藤会長は、協議会職員に帰宅を指示。高齢者などの安否確認を実施。

○ 日没後 眠れない夜

松末小学校の避難者は約50人。建物の2階まで迫る水に、不安と恐怖を感じながら、励まし合い、一晩を明かした。

○ 午後6時 松末小学校へ

会長の電話に「自宅に土砂が流れ込んでいる」と妻からの連絡。帰宅しようとしたが、土砂崩れや氾濫に恐怖を感じて帰宅を断念。警察官に促され、松末小学校へと避難した。

○ 午前10時 決意の避難

極度の緊張から限界を迎えた子どもたちのため、伊藤会長は学校からの移動を決断。より安全な避難所へ向かうバスを目指し、崩落した道を徒歩で進んだ。

○ 翌朝 雨脚が弱まる

嵐が過ぎて

自分の家が分からないほどの甚大な被害。「空爆の跡のようだ」と言われたほど田園風景は一変し、変わり果てた古里の姿に、住民は立ち尽くした。松末の奥地、乙石地区では家屋が流され、尊い命が失われた。

想定を越える災害の恐怖
「からぶり」でも早期避難を

「平成24年にも豪雨を経験しましたが、一部地区が孤立するなど危機はあったものの、人的被害が無かった。『今回も大丈夫』、その根拠の無い自信が私たちの判断を誤らせたのかもしれない」と伊藤会長は振り返ります。「一生」一度の大雨と呼ばれる平成24年の1時間最大降水量は約60mm。しかし平成29年は約130mmにも及びました。「想定外を想定すること。準備に上限はありません。早期の避難が『からぶり』になっても、それで良かったと思える意識が大切です」。

災害時には住民の安否確認を行い、松末小学校への避難を主導。被災後は避難所で住民の困りごとを市に伝えるなど奔走し続けた伊藤会長。行政との意見交換会を企画するなど、情報共有に腐心してきました。「将来の展望を知ることが希望になる。住民の思いが反映された復興を実現し、住みやすい地域を取り戻したい」と前を向きまします。災害から2年、全住民の願う復興への道のりは今も続いています。

昨年の教訓糧に 福智町ハザードマップ更新

昨年福智町を襲った豪雨を受けて、ハザードマップを一新しました。被害の実情をもとに、より正確な危険箇所が掲載されています。この地図は避難における大きな指針の一つですが、危険とされている箇所以外でも警戒を怠らず、早めの避難を心がけましょう。新しいハザードマップは今月号の折り込みか、町公式ホームページからご確認ください。→



↑ 震災後、松末地区の乙石地域では地域住民がインターネットで寄付を募り実現したこのぼりが掲げられ、2年目を迎えた。



写真提供：西日本新聞社



写真提供：西日本新聞社

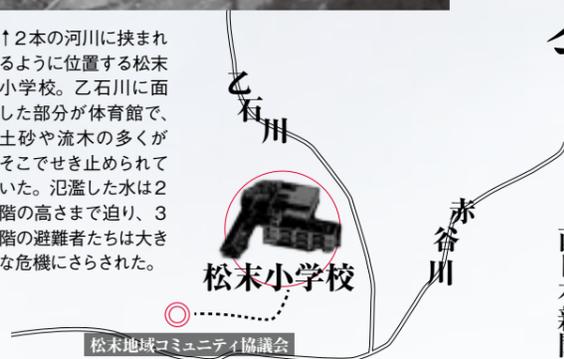


写真提供：西日本新聞社



孤立した校舎で

校舎を囲む2河川の氾濫で孤立した松末小学校。逃げ場をなくした避難者が生死の危機に直面した夜、西日本新聞・中川記者の実体験からその恐怖をたどります。



↑2本の河川に挟まれるように位置する松末小学校。乙石川に面した部分が体育館で、土砂や流木の多くがそこでせき止められていた。氾濫した水は2階の高さまで迫り、3階の避難者たちは大きな危機にさらされた。



↑5日の豪雨当時の校庭と(左)翌朝の状況(右)。車両が土砂で埋め尽くされ、崩落した崖の様子が確認できる。(写真提供:西日本新聞社)

取り残された校舎で 死の恐怖迫った一夜

「朝倉では100ミリの雨が降ったようだが、様子はどうか」本社からの連絡を受け、当時西日本新聞朝倉支局長だった中川次郎記者は現場へ向かいました。

「地域のかたと、『5年前とどちらがすごいですか』、など話したのを覚えていますが。まだ余裕があったのかもしれない。しかし予想を超え豪雨に逃げ場を失い、松末小学校へと非難。水かさ2階にまで達し、校舎の3階で大人から子どもまで約50人が孤立しました。「子どもたちが『白い車が流されている、人が手を振っていた』と声をあげたが、



西日本新聞社 筑豊総局
中川次郎 記者

何もできない。空腹などは全く感じなかった。死ぬかも知れない、本気でそう思いました。」

極限の状況下でも、報道の責任を感じていた中川記者。「周りの人の電話は充電が切れ、私も仕事のために機器の充電は残しておきたかった。それでも業務用パソコンを開き、雨雲の動きを調べました。状況を知れば、周囲を励ませると思っただけです」。岩や木々のこすれ合う音、鳴り響く雷鳴、バケツをひっくり返したような雨の轟音。停電した暗闇で「もう少し、あと少し」と時が過ぎるのを待ち続けました。

命を守る。そのために

幸運重なった危機からの脱出 雨で死ぬことを実感

「もし体育館がなかったら」翌日、流木と土砂をせき止めた体育館を見て中川記者は言葉を失いました。昨日とは一変した風景。現実とは思えないその光景に誰もが立ち尽くす中、伊藤会長は全員を鼓舞し、歩ける人から避難所行きバスへ徒歩で向かいました。その道のりは、地元消防団らにより土砂が取り除かれており、疲れきった中川記者ら避難者は迎えられました。



↑バスに向かわず松末小に残った避難者も、到着した消防隊員によって無事全員が救助された。

「あの時、誰もが被災者でありながらお互いに助け合い、支え合いました。そのことで多くの命が救われたのは間違いありません。孤立した私たちはなすすべも無く、救助を待つしか無かった。助かったのは幸運でした。そうならないためには、手遅れになる前に逃げるしかありません。取材した人や顔見知りも命を落とした。『雨でも人は死ぬ』ということを実感しました」と中川記者は振り返ります。

↑土砂と流木が流れ込んだ体育館(上)と校舎(下)。体育館がせき止めなければ、校舎も危険にさらされていた。



災害時に分かりやすい指標を内閣府が設定 防災情報に「警戒レベル」を新設

災害時に気象庁や公共機関が発信する情報に、5段階の「警戒レベル」が追加されました。今後は防災無線やエリアメールによる警報発令時は「警戒レベル4、避難開始」などレベルと避難情報が発信され、状況がより把握しやすくなります。災害時は情報が最も重要。早めの避難を心がけましょう。

警戒レベル	避難情報・とるべき行動
警戒レベル5	災害発生情報 すでに災害が発生している状況であり、命を守るための最善の行動が必要。
警戒レベル4	避難勧告 / 避難指示 (緊急) 災害の可能性が極めて高く、立ち退き避難を基本に行動する。困難な場合は近隣や建物内の安全な場所へ緊急避難。
警戒レベル3	避難準備・高齢者等避難開始 避難に時間のかかる人は避難開始。危険を感じた場合は自発的に避難する。
警戒レベル2	注意報 ハザードマップ等による避難場所や経路の確認・注意を行い、避難に備える。
警戒レベル1	警報級の可能性 防災気象情報の等の最新情報に注意を向け、災害への心構えを高める。

一人の記者として 伝え続ける命の重み

無事に帰宅した翌日から現場へ向かったという中川記者。「実は筑豊への転勤が決まっていたのですが、会社にかけあい3か月残留しました。この災害を伝える義務があると思ったからです」。1週間以上休まずに、深夜まで被災地の実情を発信し続けました。「『いい経験をしたね』と言われたこともありますが、そんな必要は絶対にあります。体験した人とそう



↑被災直後、黒板に残る浸水の跡。現在廃校となった松末小では、多くが当時ままの状態が残っている。

でない人ではどうしても温度差がある。記者として、一人の被災者として、その差を埋めていきたい」と力を込めた中川記者。朝倉市を離れた今も定期的に豪雨関連の記事を書き、警鐘を鳴らし続けています。



↑人見地区の自主勉強会に南野救命小隊長とともに参加し、救命技術を講習。昨年の福智町防災講演会では当時を振り返り、言葉を詰まらせながらも体験した悲惨な実情を伝えた。

若いときは自分の手で全ての命を救う、そう思っていました。しかし救命に携わり20年、人の死を身近に感じ、後悔と悔しさを経験してきた中で、自分だけの力に限界を感じました。我々消防士には日々培っている技術と経験がある。一般のかたでも使える救命の術も知っています。私が伝えることが緊急時に少しでも役立ち、一つでも多くの命

が助けられればと今は考えています。広域で同時多発する災害時、限られた人数の「公助」には限界があります。その時に生きるのが日頃からの備えである「自助」と、周りの助け合い「共助」です。しかし救助者が要救助者になることは絶対に避けなくてはなりません。限界を知り、できないと判断したときは自分の命を優先し、我々を頼ってください。全力で救助に当たります。

**持てる経験・技術・知識
伝えることで救う命**

から自然災害の前では、どんな経験も通用しません。親しい人の命を失ったとき、誰もが十字架を背負う。そうならないためにも、身を守ることを最優先に考えてください。

金田6区(人見)区長 / 福智町消防団長
松山 榮治さん



毎年雨期になると冠水の危機を迎える人見地区のために自主勉強会を行いました。過去に聞いた二場さんの言葉が強く心に残り、今回講師としてお招きしました。これをきっかけにさらに深く話し合い、地域防災に生かしていきたいです。

**過去の教訓を学び、生かしていくために
福智町防災講演会** **参加無料**

毎年雨季を前に開催している「防災講演会」。今年は報道の立場から災害と向き合う九州朝日放送の太田祐輔氏を講師に招き開催します。この機会に、もう一度身近な防災について考えてみませんか。

日時 6月23日(日) 10:30 ~ 12:00
場所 福智町地域交流センター (伊方4478番地1)
演題 「災害多発時代にKBCが自治体とともに取り組んでいること」
講師 KBC九州朝日放送株式会社 防災ネットワーク担当 **太田 祐輔氏**



テレビやラジオで活躍し、アナウンス部長も経験。どうすれば一人でも多くの命を救う報道ができるのか、常に問いかけながら日々を過ごす防災部門の解説委員。

災害時、情報の収集と共有は何よりも重要になります。高齢者や病気がかたなど、すぐに動けない人もいます。避難経路や連絡網を事前に地域で確認しておくこと、また住民間の意見を集約し、我々や行政など公的機関との情報交換を日頃から行うことで、命が助かる可能性は高まります。

災害が多発する昨今、3つの「助」について、もう一度考える時が来ているのかも知れません。私はいつも「近助」という言葉で地域が連携する

重要性を伝えていきます。また常に最悪の事態を想定すること。増水時に田畑や川など見に行くのは絶対にやめてください。いざという時、命を守るのは人とのつながりと早めの避難です。そのことを決して忘れないでください。



↑昨年の福智町での豪雨時、町民からボートを借りた消防隊が救助を実施。これが共助の際たる例と二場さんは強調する。



↑朝倉市に派遣された消防職員たち。災害発生時には、全国から応援隊が派遣される。



**かけがえのない命のために
もう一度考えたい3つの「助」**

救命の最前線から

常に救助者として、命と向き合い続ける消防士。災害時、どのように対応し、どう備えるか。朝倉市で悲惨な現実を目の当たりにした金田分署の二場小隊長に伺います。



二場 祐介 Yusuke Futaba
前任の田川地区消防本署所属時に、特別救助小隊長として朝倉市への災害派遣を経験。現在は金田分署消防小隊長として勤務。強い責任感と部下を思う指導で信頼も厚い。



**命の期限、72時間の壁
最前線で見た被災地の現実**

インタビュー / 消防士 / 田川地区消防 金田分署所属 二場 祐介さん